

の聖所の三種に類別して具體的事例を説明されて居る。家屋敷の聖所は直接巫俗に關するところでないが爲であらうか、その記述を極簡単に止められたが、今後この方面のより詳細な教示を受ける機會があれば、同好者の裨益を得ること少くはなからう。第十二章「巫俗の道佛二教との關係」では、巫俗の道佛二教との習合の深きことを説き、進んで今日の社會問題に言及され、朝鮮巫俗の迷信邪信の弊害を是正し、彼等を善導する根本的一方策として、多少歪曲されてその巫俗中に包容された佛教的要素をば、巫魂とその信者の間に宜しく正統化して以てこれを所謂眞實教としての佛教に更に淨化發展せしめることにあると論じられて居る。

以上簡単に内容の紹介を終へた。數年の現地調査に成る一大勞作を、今僅か机上で一讀したばかりを以て、輕々しく妄評することとは寧ろ差控ふべきが至當であらう。たゞ以下一二望蜀の言を敢へてし、以て將來の教示を乞ふことは、先輩精進の成果に甘える所以でもあらう。先づその一は、巫俗文化複合體の各特質に就いての地理的分布上の考察である。巻尾に附せられた現地調査地圖に依れば、その調査地域は廣く全鮮に亘り、それに費された努力には全く敬服の外ないが、今若しその境域に於て特質分布の問題が示されたならば、巫俗文化の地理的及び歴史的研究上、多くの示唆を得ることが出來たであらう。その第二は、巫魂に直接關係のある事項のみに限らず、これと發生史的に深い關係にあるところの一般民俗 folklore の方面に對する一段の關心をより多く示されたならば、吾々の受け得た教示にはより意義深いものがあつ

たであらう。最後に紹介その意を盡さず、評言その正中を得ず、爲に著者に對して非禮を敢へてしたことを多謝しつゝ、なほ秘藏されて居るであらう多くの貴重なる資料を、つゞいて公にされる日の一日も早からんことを企願するものである。(四六倍版、上卷五八〇頁、下卷三二一頁、附録一一四頁、參考圖録二〇八圖、地圖一葉、索引四八頁、京城府大阪屋號書店發賣、上卷八圓、下卷拾圓)(三品彰英)

通 溝 上 卷

池 丙 宏 著

古來韓半島に政治的發展をなしたものの必ずしも少しとはせない。箕子が傳説はしばらくおくも、所謂三韓、三國、或は樂浪、帶方の如き拓植の勢力も亦その一であらう。就中樂浪に於ける漢の帝權と三國にみられる半島の生動は古來その優なるものといふ事ができる。従つて、近時の學的興味又これら諸國諸勢力の研究に牽かるゝ處多く、あるひは文獻的考察或は則物的理解に於てその進展のいちぢるしきものをみるのである。

こゝにこれらの則物的理解即ち所謂考古學的理解に於ける諸般の成果をみるに、樂浪遺址における漢時の文物、南しては新羅王朝の燦然たる文化の餘映、北しては高麗に於ける巨大なる墳壘とその丹青、これらに對してやうやく系統的研究の一緒がたぐられ得たといひうる事ができるもの即ちそれである。こゝに擧げんとする「通溝」なる四六版四倍大の一巨冊又その一であつて、著者池

内宏博士の學識と、牟頭婁塚、以下諸塚とは永遠に記念さるべく
殘るといふべきである。

本書述べんとする處これを一言にいふならば他なし、たゞ滿洲
國通化省輯安縣に遺存する高句麗時代の古蹟に對する學術的調査
の報告である。これをしも章を分つ六。細節又これに従ひ、説き
去り説き來たつて七十三頁に及ぶ。書中隨所に散見する該博なる
文獻的知見は燦としてかゞやき、城壁、塚墳の構築的事實の描寫
にいよ／＼光添ふものあるを思はせる。就中、その主力をつくせ
るもの、石塚及び土墳の年代二篇に存する事いふまでもなく、或
は有名な廣開土王碑と大王・將軍二塚の位置を論じて關野博士
の將軍塚即廣開土王陵説に反して通説なる大王陵説をとり、或は
將軍塚を以て山上王陵に推し東川玉のそれを臨江塚に、西川玉の
それを千秋塚に擬せんとせられる。これはまことに興味多き一試
案であつて、それを起點として、今後考説の榮える事を思ふので
ある。たゞ吾々は知らない、則物的なる考古學が文獻的知見と眞
實なる意味に於て、交叉する一點を發見しうるや否やを。

博士は以上の如き興味ある見解を披瀝しつゝ、次の如き敷衍を以
て本章ならびに本書を終つてゐられる。

曰く、高句麗の最初の根據地であつた桓仁附近の古墳を實査し
た人々の言に依ると、それ等は何れも石塚であるといふから、高
句麗の墳墓が魏志卷三〇高句麗傳に、「積石爲封」と記るされてあ
るやうな石塚から土墳へと移變したことは、殆んど疑ひなく、即
ち高句麗の墓制に石塚時代と土墳時代との區別を認めるのは、決

して不當であるまい。そうしてそれ等の時代の全體の境目は長壽
王十五年(紀元四二七)の平壤遷都を目安として其の前後に置かる
べきであらう。石塚及び土墳の所在の互に相錯はつてゐるのは、
後者が同族の祖先の墓域に近く、或は既存の石塚の空閑地に築か
れたからであらうと思はれる。」と兩式墳の混在を解し「高句麗全
體の墓制の上から見れば此の國が今の桓仁の地なる沸流水(渾江)
の流域に據つてゐた時代、及び降つて通溝に於ける丸都を國都と
した時代は石塚時代、更に降つて首都を平壤に置いた時代は土墳
時代であるといへよう。」と。まことに、截然たる年代觀は博士の
學的分類性を示すに充分である。たゞ問題は、土塚の發生以後卒
然として石塚築造の事があとを絶つたとする考の論理的正當性の
如何にかゝるといふべきである。

左に本書の目次をかゝげて置く。

第一章 序説

第一節 高句麗の古都と通溝

第二節 通溝の遺蹟に對する學術的調査

第三節 新發見の壁畫古墳と其の調査

第二章 通溝平野

第三章 丸都城と國內城

第四章 高句麗の遺蹟

第一節 通溝城——丸都城址

第二節 山城子山城——丸都山城址

第三節 廣開土王碑

